

マルコによる福音書 9 章 2 節～13 節

2016 年 11 月 24 日

古本 靖久

- 1、聖歌 230 番 「きよき山の上」
- 2、お祈り
- 3、聖書輪読 （新約聖書 78 ページ）
- 4、テキストの位置

今日の箇所を、マルコによる福音書のクライマックスだと考えることができます。

イエス様たちはすでに受難への道を歩みだしました。そして今回、イエス様と数人の弟子たちは山に登ります。そこでイエス様の衣は白く輝き、まさに栄光に包まれます。

受難への道	8:27-30	イエスとは何者か
	8:31-33	第一回受難予告
	8:34-9:1	弟子であることとは
	9:2-13	イエスの栄光
	9:14-29	汚れた霊を追い出す
	9:30-32	第二回受難予告

ところがイエス様はそのままそこにとどまらずに、山を下っていきます。神に近いところから再び人々が生活するところへと戻ってくるのです。イエス様を示される栄光への道、それは一体どのような道なのでしょう。



5、節ごとに

◆イエスの栄光

9:2 (そして) 六日の後、イエスは、ただペトロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に(彼らだけを率いて) 登られた(る)。(そして) イエス(彼)の姿が彼らの目の前で変わり、

イエス様はヤイロの娘のいやしの場面でも、ペトロ、ヤコブ、ヨハネの三人を連れていきました。しかしこの三人が、イエス様のことを特別深く理解したわけではありません。

ともかくイエス様は彼ら三人だけを率います。この「だけ」は強調されています。三人はこのようにイエス様の間近にいたにもかかわらず、イエス様のことが理解できませんでした。さらにこの三人は、ゲツセマネの園でイエス様の横で居眠りをしてしまいます。

彼らが登った高い山は、聖書の中では神さまがご自分を啓示される場所として、たびたび登場します。そして「変わり」という言葉はギリシア語では、神々が人間に姿を変える、あるいは逆に人間が神々の姿になることを言い表すときに用いる用語です。つまりイエス様は、弟子たちの前に神的存在としてあらわれたのです。



9:3 (そして彼の) 服(衣)は真っ白に輝き、この世(地上)のどんな(布)さらし職人の腕も及ばぬほど白くなった。

みなさんは白という色から、どのようなものを想像されるでしょうか。インターネットで調べてみると、良いイメージとして潔癖、平和、祝福、勝利、あまり良くないイメージとして冷淡、薄情、空虚、味気ない、また白が好きな人の性格として、意志が固い、正義感が強い、理想主義、正直、素直、真面目、神様を信じているなどが挙げられていました。

ユダヤ教では、神さまの世界は白いイメージで捉えられていたようです。わたしたちが葬送式をするときにも白い祭色を用いますが、何となく神の国は白く輝くものとして考えているのかもしれませんが。そしてここではイエス様の衣が、白く輝きます。

9:4 (そして) エリヤがモーセと共に (彼らに) 現れて、(そして彼らは) イエスと語り合っていた。

旧約聖書に出てくる人物の中で、エリヤとモーセとエノクという三人は、死ぬことなく昇天したと信じられていました。エリヤは列王記下 2 章 11 節に「彼らが話しながら歩いていると、見よ、火の戦車が火の馬に引かれて現れ、二人の間を分けた。エリヤは嵐の中を天に上って行った。」とあります。また「エノクは神と共に歩み、神が取られたのでいなくなった。」(創 5:24) という記述から、エノクも同じように天に昇ったと考えられていました。

さらにモーセはヨシュア記 1 章 2 節で「わたしの僕モーセは死んだ。」とあるのですが、申命記 34 章 6 節の「今日に至るまで、だれも彼(モーセ)が葬られた場所を知らない。」という記述が元になり、モーセも死んでいないのだと信じられるようになったそうです。イエス様が語った相手は、神さまの前で生きている存在として書かれているのです。

9:5 (そして) ペトロが口をはさんで (応えて) イエスに言った (う)。「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。仮小屋 (幕屋) を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」

その様子を見て、ペトロが口を開きました。誰かの質問に対して発言したのではなく、その場の状況に対応して物を言ったという感じでしょうか。ペトロはそこに幕屋を建てることを提案しました。幕屋とはテントのことです。イスラエル民族はもともと遊牧民だったので、幕屋は住居をも意味しました。そして出エジプトから荒れ野をさまよったところには、神さまが臨在する場所としても用いていました。

ペトロはなぜ幕屋を建てようとしたのでしょうか。幕屋を建てることによって、三人がずっとこのことのできる場所を確保しようとしたのだと考えられます。しかしそのことは同時に、三人をそこに留めておくことを意味します。ペトロはこの三人と共に、山の上にずっといたいという気持ちがあったのかもしれませんが。

9:6 (というのも) ペトロは、どう言えば (答えれば) よいのか、分からなかった (からである)。弟子たち (彼ら) は非常に恐れていたのである。

ペトロは驚きのあまり、その栄光の中に留まろうとしました。しかしその提案は、祝福を自分たちだけのものにしようとしただけでなく、イエス様がこれからどこに向かおうとしているのか、まったくわかっていないことをあらわにしました。

ペトロはイエス様に何度厳しく注意されても、神さまの意志がイエス様の受難と復活であることを理解することができませんでした。ペトロの考えは的外れだったのです。

9:7 すると、雲が現れて（生じて）彼らを覆い、（そして）雲の中から声がした。「これはわたしの愛する子。これ（彼）に聞け。」

出エジプトのとき、イスラエルの民を導いたのは雲の柱でした。雲は神さまがいる場所であり、そこから発せられる声は神さまの声です。

この言葉は1章11節ととても似ています。しかし1章11節が「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」とイエス様だけに語っているのに対し、ここでは弟子たちに対して直接語られています。つまり神さまは弟子たちに、イエス様のみ言葉に聞きなさいと命じられているのです。



9:8 （そして）弟子たち（彼ら）は急いで辺りを見回したが、もはやだれも見えず、ただイエスだけが彼らと一緒におられた。

周りを見回しても、そこにいたのはイエス様だけでした。「彼に聞け」という言葉だけを残して、イエス様が栄光に包まれた状態は終わりました。この「聞く」という語は「聞き従う」という強い意味を持っています。受難へと向かう道を、イエス様に聞き従いながら歩みなさいと、命じられているのです。

9:9 （そして）一同（彼ら）が山を下りるとき、イエス（彼）は、「人の子が死者の中から復活する（時）までは、今見たことをだれにも話してはいけない」と弟子たち（彼ら）に命じられた（指示した）。

彼らは山を下ります。イエス様の栄光は、山の上で光り輝くものではありませんでした。イエス様の栄光は、十字架へと向かう苦難の道なのです。

もしイエス様が山に留まり、モーセやエリヤとずっと談笑されていたとしたらどうでしょう。わたしたちとイエス様とは、まったく関りを持たなかったと思います。しかしイエス様はわたしたちの元にきてくださいました。わたしたちがいる場所まで、つまりわたしたちの目線まで下りて来られる。それがイエス様なのです。

イエス様はこのことを誰にも言うなと言われます。人の子であるイエス様が復活するまでその沈黙命令は続きます。それはイエス様の復活によって、弟子たちの目が開かれることを意味しているのです。

9:10 (そして) 彼らはこの言葉を心に留めて、死者の中から復活するとはどういうことかと (お互いに) 論じ合った。

弟子たちはイエス様の言葉を心に留めます。聖書の中にはイエス様の母マリアが、思い巡らしたり、心におさめたりという表現が出てきます。イエス様の復活の日まで、弟子たちはこのイエス様の言葉を何度も思い返しながらか、その意味を考えていました。

9:11 そして、(彼らは) イエス (彼) に、「なぜ、律法学者は、まずエリヤが来るはずだと言っているのでしょうか」と尋ねた。

唐突に話が違う方向にいったと感じるかもしれません。しかし弟子たちは、死者の中からの復活と終末とを同じようなことだと考えていたのかもしれません。

旧約の預言者の中でも伝説的存在であったエリヤは、終末の時に再臨して最後の審判に備えさせると信じられていました。マラキ書 3 章 23 節には「見よ、わたしは 大いなる恐るべき主の日が来る前に 預言者エリヤをあなたたちに遣わす。」とあります。

イエス様が来るべき救い主であるならば、エリヤはすでに来ているはず。でもエリヤはどこに来ているのか、おかしいではないか。それが人々の考えでした。

9:12 イエス (彼) は (彼らに) 言われた。「確かに、まずエリヤが来て、すべてを元どおりにする。それなら (ところで)、人の子は苦しみを重ね、辱めを受ける (ないがしろにされる) と聖書に書いてあるのはなぜか。

エリヤはすべてを元通りにするために来ます。すべてを元通りにするとは、世の中の秩序を神さまのみ心にかなう状態に戻すことです。

イエス様は弟子たちに答えて言われます。「あなたがたはエリヤが来てすべてを立て直すと言っている。同じように人の子は受難すると書いてあるはずだ」と。その事実から目を背けずに受け入れ、考えていきなさいと。

9:13 しかし、(わたしはあなたたちに) 言っておく(う)。エリヤは(すでに) 来た(。)が、(そして) 彼について聖書に書いてあるように、人々は(彼について) 好きなようにあしらったのである。」

イエス様のこの答えは、洗礼者ヨハネがエリヤであったことを示唆します。エリヤと洗礼者ヨハネとの間には、そのいで立ちや言動など、共通点が多くありました。またイエス様自身も洗礼者ヨハネのことを「彼は現れるはずのエリヤである。」(マタイ 11:14) と言っています。

洗礼者ヨハネはすでに、ヘロデによって殺害されていました。しかしその死は、イエス様の受難と死の前に、神さまによって計画されたものだったのです。

<今日の箇所から>

イエス様は山に登られ、栄光の姿へと変えられました。旧約の律法の代表であるモーセと、預言者の代表であるエリヤと共に語り合う姿は、人々が望んでいた神の国の姿なのかもしれません。

ペトロたち三人には、その神の国の様子を垣間見ることが許されました。彼らは思ったことでしょう。「このまま、この場所にいたい」と。

しかしイエス様はそうはなさいませんでした。山を下ってこられたのです。山の上でしか見られなかった神の国を、わたしたちの間に下ろして下さったと考えることもできます。

そしてそれは、すでに予告されていたことでした。「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日の後に復活することになっている」というのが、神さまの意志でした。

わたしたちも神さまの恵みにあずかったときに、そのままにいたいと思うこともあるでしょう。しかしそれは神さまのみ心ではないのかもしれません。神さまの栄光を肌で感じたときに、イエス様は言われるのです。「さあ、一緒に山を下りよう」。

そして人々の間を、イエス様と共に歩いていくのです。それぞれの十字架を負いながら。

今回の学びはこれで終わります。次回は 12 月 23 日(金)10 時 30 分からです。「汚れた霊を追い出す」(マルコ 9 : 14~29) について学んでいきます。